

国 語〔問 題〕

(100点・90分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見たり、裏返したりしてはいけません。
2. この問題冊子は26ページあり、解答用紙は1枚(両面)です。
試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁などに気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 試験開始後、ただちに解答用紙の所定記入欄に、氏名・受験番号・誕生日をそれぞれ正しく記入し、さらに受験番号・誕生日をその下のマーク欄にマークしなさい。
4. 受験番号・誕生日が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
5. 解答は、解答用紙の解答欄に各設問で指示された方法で記入しなさい。
マーク方式は、例えば、

| |
|----|
| 20 |
|----|

と表示のある問いに対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号20の解答欄の②にマークしなさい。

(例)

| 解答番号 | 解 答 欄 |
|------|-------------------|
| 20 | ① ● ③ ④ |

6. 問題冊子の余白等は、下書きなどに適宜利用してよいが、各設問で指示された解答は、必ず解答用紙の解答欄に指示された方法で記入しなさい。
7. この時間は「数学」または「国語」の選択科目となります。メディア情報学部情報システム学科を受験する場合は必ず「数学」を選択して解答しなさい。
8. 試験終了後、提出は解答用紙のみとし、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二〇世紀後半、人文系の学术界では、メディア文化がもたらすひとびとのアイデンティティ形成という問題が盛んにとりあげられた。主にマスメディアを扱う社会学においてである。急いで付け加えておくと、「メディア」という語を冠する研究は、往々にして二〇世紀のマスメディア研究をトウシユウしたものが少なくないが、ここではそういった方向に入り込まないように、アイデンティティ形成にとつてのマスメディアとメディア技術の関係を段階的に整理しながら考えていきたい。

まず、ひとびとの意識のなかに集団的なアイデンティティを醸成^bする上で、出版メディア、とりわけ新聞や小説が大きな役割を担ったという、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論が、その第一弾である。いわゆるナショナリズムの成立に関する従来の議論であれば、主に一八〜一九世紀において、傭兵部隊ではもはやもたず、国民皆兵の段階になってそれは勃興^cした、という歴史的説明が一般的だったが、アンダーソンはそこに一石を投じた格好である——日本ではそうした学説が逆転して輸入され、二一世紀になって逆に、軍事上の傭兵体制の終焉が国民皆兵意識をもたらしたというのが目新しい考えであるかのよう¹に主張する者もいたりするが。

メディア経験を共有することで、一定の地理的な拡がりの中で生活を営むひとびとの間に共有された集団的心性が醸成されるのではないか、といった論は、欧米を中心に（日本の外側では）二〇世紀末にかけて、理論面^{注2}でアルジュン・パデュライによってアップデートされる。すなわち、国境をやすやすと跨^{また}いでその流通を拡げるデジタル・メディアの拡大さらにはそのオンライン上での組み込みが、国の圏域を越えた集団的な感性や自意識を生み出しはじめた、とアパデュライは論じたのだ。デジタル技術がひとびとの自己意識に効力を発揮しはじめた、ということである。メディア経験が国民国家の圏域を軽々と越えて拡がることになったいま、共有される集団的心性もまた大きく広がっていくことになったのである。

だが、もしかすると二一世紀のこんにち、事態はいつそう複雑化しているのかもしれない。²

というのも、自己表象が^dショウレイされ、その発信が促されるこんにち、そうした制作や発信の作業の際にかき集められる素材は、もはや国境などなんの障害にもならないほどインターネット上の流通のなかにあり、いともたやすくアクセスできるものになっているからである。自己をめぐる表象の作成作業は、そうしたかき集めにおいてなされるものとなった。このわたしは、インド映画に **A** し、南米の音楽にハマリ、イタリアのグルメ情報に **B** する、そんなアジア

人である——といった具合だ。じっさい、グローバルなストリーミング配信は、『ゲーム・オブ・スローンズ』のように、世界一斉配信というイベント性を自らのセールスポイントとして売り出したし、音楽サービスでは八〇年代日本のシティポップを誕生から四〇年の月日を越えてグローバルヒットチャートにのせた。少しうがった言い方をすれば、人種的にも民族性においても、ジェンダー的にも性においても、まさに色とりどりのといていい多様性が、オンラインで流れるイメージとテキストの表象空間を埋め尽くしている。

ウェブ上にあつて、アイデンティティをかたちづくる文化表象は、まるでスーパーマーケットのように陳列 (display) されている、とある社会学者は論じている。自身の生を取り巻いていた文化表象の数々は、まさにグローバルな拡がりの中で、いまここで生を営むわたしのもとに、あれやこれやと飛び込んでくる。それは、それまで自分を「○人らしさ」、「男 (女) らしさ」といったイメージとテキストで条件づけしていたこのわたしのアイデンティティの制約の数々を、あれやこれやの豊かさをもって奔放に解き放つのである。このわたし自身のわたし、性をこしらえているのは、色とりどりの文化混濁的なわたしである、といってもおかしくないほどに。

自己表象の時代となつて、文化的アイデンティティが手軽に獲得できるものになつたという事態は、それはそれで開放的で、多幸感すら生む。が、他方でしかし、それらが組み合わせるとき、自己イメージの絶え間のない更新が常態化する、³ という新たな桎梏の中に放り込まれる世界内存在ともなるだろう。ひとは自らの実存のロールモデルをあちこちに、次々と求め、己のありようを絶え間なくアップデートしていく、あるいはしていかざるをえない、というループにはまり込

でいく。サブカルチャーで「沼」という言葉が用いられるようになったが、まさに当を得た表現だ。いわば自己形成の作業に絶え間なく自己表象の努力が織り込まれ、自己理解を行動させれば、じつに多様なわたしが出現する、その動態的な変動において、わたしたちは己の生を営んでいる。二〇世紀的なわたし性が懐かしいほどに、こんにちのわたしの群れは忙しく自らを変動させているのである。

だが、こうした仕方で情報技術と人間のセッティングに関わる問題を括り出すのは、いわば社会学的な考察の水準のものである。

素材が周囲に数多あるなかで自己の表象化を自らおこない、また他者に向けて発信するさまは、いや、刻々と変わる素材の旋回あまたのなかで自己表象を推移させ、また他者との関係を絶え間なく仕切り直しているさまは、どこかに社会なるものがある。4
があつてそれを計測し理解しようとする構えとは、大きく異なっているようにみえる。

つまるところ、現実的な存在としてのこのわたしは、どこでもない場所から社会を眺めているわけではないことが、いやがおうでも随時自覚させられる毎日となったのだ。一九世紀、そして二〇世紀であれば、情報をめぐる制作のブロック、流通にかかわるブロック、そして受容をめぐるブロックは、それぞれ別々に存在し、それぞれの担い手は別々に労働に携わっていた。新聞や放送を思い浮かべればよい。かつては情報を調査する記者や調査員、それらを記事や番組に組み立てる編集者やディレクター、それを読者や視聴者に配送したり配信したりする運搬者や技術者が、別々の業種に分かれて分業していた。それがいまや、すべてひとりで同時に担うことすらできるほど、情報技術は劇的に進化している。YouTubeひとつとってみてもわかることだ。端的にいえば、ひとはいま、制作や発信の行為者であるのを拒絶することはむしろかしい。どこでもないポジションから社会なるものに向けてテレビ画面でコメントを語る識者の言葉が「上から目線」のご託宣に聞こえてしまうのは、すでにあらゆるひとがフラットな表現行為者として存在しているという状態がデファクトスタンダードになったからだ。5
そこでコミュニケーション作法が「上から目線」をうざいものに押し上げてしまっているからかもしれない。

ひとは常に行為する主体として在る、そういう存在者へと移行しつつある。端的に言えば、

D 主体へと——それぞれ個別の人間の間でどのように自覚されているのかはともかく——広く社会で共有される人間像が変容してきているのである。

C 主体から、

これは同時に、制作と発信と受容の分業体制が一定程度安定していた時代が終焉したということかもしれない。そうした分業体制では、人間はこうあるべきだ、日本人はこうしなくてはならない、男性は男性らしく、女性は女性らしく、と道徳をめぐって、ひとびとは触知し、語り、そして身につけることができただろう。だが、いまや個々の人間が、個々に規範をつくり、それに個々に従う、といった具合に生を^eとりおこなうようになってきている（むろんのこと、そうした追い込まれ方こそが、先に見たアイデンティティのスーパーマーケットが拡大する原因になっているだろう）。

第二の近代を語るアンソニー・ギデンズがセルフモニタリングの必要性を主張し、その論の方向に一定程度同調していたウルリッヒ・ベックが「個人化する社会」では「自らの神」への信仰の時代に入ったと説いていたのも、それが理由だといえる。認識に軸足を置く主体であれば、正しく認識することが求められるところが、行為をすれば、どこかの相対する存在者と抵触するリスクを排除することはできなくなる。その度合いが高まれば、（かつて宗教の時代においてそうだったような絶対的な正義はもちろんのこと）近代に課せられていた相対的に安定的な正義概念を頼りに思考することもできなくなる事態を生むだろう。

フランス現代思想風にいえば、ミシェル・フーコーが形どった一九世紀の人間のありよう、すなわち「規律訓練」型のありようが失効しつつある、ということだ。それは「経験論的—超越論的二重体」とも呼ばれた。暴力的な単純化であることを承知でいえば、そのようなフーコーが描き出した、自らの経験様態を規律訓練していくという理念モデルが失効しつつある、ということである。そうした規律訓練は、サーキュレーションの内と外でひたすら空回り状況を生むだけになりつつある。じつさいフーコー自身も、晩年には「規律訓練」型社会から「生政治」^{せいせい}の社会への移行を論じはじめていた。フランス哲学に立ち入る余裕は筆者の力量にはないが、行為の時代がメタレヴェルからのチェックメカニズムの枠組み

を溶け出させつつあり、それがために正義論がさまよい、「あれは正しい」、「これは正しい」といった倫理の在り処に人々がやつきになる時代に突入したのかもしれない。

じじつ、デジタル技術の進化と遍在にともなう行為に軸足を置く人間の出現は、新しい倫理のかたちをあちこちで待望しはじめている。

たとえば、情報技術の発達は、遺伝子を操作する地平を開き、従来の道徳観や倫理観を覆すような事態を招来した。一方では、遺伝子操作による身体能力の強化をどこまで認めるか、あるいはまた、計算能力の向上や記憶の抹消といった介入はどこまで認めうるか、といった問題が次々に立ち上がっている。他方では、よりデリケートな水準の話になるが、胚^{しゅ}のどの段階で遺伝子操作をはじめてよいのか、あるいはそもそも一切を禁じるべきなのか、といった宗教観まで問われている。

また、人間と他の動物とのより豊かな共生の可能性があちこちで問われていることも、よく知られているだろう。こんにちの進化生物学や脳科学の知見をみてもわかることだが、人間と動物の間の境界は溶解しつつある。そればかりか、人間と無生物の関係も、わたしたちは視野に収めるよう求められている。

⁸生態論的思考が肝要であることは、これまでの議論のなかでもみてきた。生態系のなかでは、人間というエージェントだけでなく、動物、植物、微生物、酸素や窒素、さらには電気や石油や天然ガスといったエネルギーなど、さまざまなエージェントが関わり、絶えず状態変化を引き起こすようになっていく。情報技術の進化と発展は、各種センシング技術の発達による多様なデータの抽出を実現し、またそれら的高速処理が実現し、これまで感知できなかった地球の各局面での動きが可視化されるにいたった。生態的世界を、より総合的、より包括的で、ダイナミックな観測が可能になったのだ。人間は、あえて「環境」という言葉を用いれば、環境の変化や行く末に対する意識が格段にアップされてきている、と捉えた方がよい。ハラリには人間（文字情報を旨とする存在者）^{せいし}を、分子の水準の存在者（他の生物）、そして原子の水準の存在者（無生物）との関わりをなかで論じた著作『サピエンス全史』があるが、人間が小麦を育てているのか、それと

も小麦が人間を使って地球上での生存を拡大し、維持しているのか、という興味深い問いに言及している。このような発想での議論がちりばめられている好著である。

さらにいえば、ノーベル化学賞の受賞者でもある気候学者パウル・クルツェンらが主張する「人新世」という概念は、まさにワールドワイドな議論を巻き起こした。単純にいえば、人間が積極的にモノとしての地球に関与しはじめて以来（その時期については、太古の農業革命から産業革命まで、多様な論議がある）、この惑星自体の組成に取り返しのつかない変化が生じているかもしれない、という認識を喚起する用語として提案されたものである。

（北野圭介『情報哲学入門』による）

注1 ベネディクト・アンダーソン……アイルランド出身の政治学者（一九三六―二〇一五年）。

注2 アルジュン・アパデュライ……インドの文化人類学者（一九四九年―）。

注3 『ゲーム・オブ・スローンズ』……ジョージ・R・R・マーティン著のファンタジー小説シリーズ『氷と炎の

歌』を原作としたアメリカのテレビドラマシリーズ。

注4 アンソニー・ギデンズ……イギリスの社会学者（一九三八年―）。

注5 ウルリッヒ・ベック……ドイツの社会学者（一九四四―二〇一五年）。

注6 ミシエル・フーコー……フランスの哲学者、思想史家（一九二六―八四年）。

注7 ハラリー……ユヴァル・ノア・ハラリ。イスラエルの歴史学者（一九七六年―）。

問一 ――線部a～eの漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して楷書で書きなさい。解答番号はa

b 2 . c 3 . d 4 . e 5 .

1 .

問二 ――線部1「アンダーソンはそこに一石を投じた格好である」とあるが、具体的にはどういふことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 6。

- ① 国民の愛国心の自発的な高まりが傭兵制度を国民皆兵制度に転換させたという従来の説明に対し、アンダーソンは出版メディアによる世論の共有が傭兵制度に終止符を打ったという新解釈を示して波紋を広げたということ。
- ② 国民が戦争に参加しなければならぬほどの国家の危機的状況が愛国心を強めたという従来の説明に対し、アンダーソンは出版メディアが国民の危機意識を扇動した影響の重大性に着目して論陣を張ったということ。
- ③ 国民自らが兵役義務を負うことを容認したのは国家への帰属意識の高まりを示すという従来の説明に対し、アンダーソンは出版メディアの情報操作が国民の心理統制に一役買った点を指摘して反論を展開したということ。
- ④ 国民皆兵制度の実現とともに国民の国家帰属意識が高まったという従来の説明に対し、アンダーソンは出版メディアを介した経験の共有が帰属意識を高める気運をもたらしたという視点を提示して反響を呼んだということ。

問三 — 線部2「事態はいつそう複雑化しているのかもしれない」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 7。

① メディア経験と集団的心性に関する議論は、これまで欧米を中心に理論的なアップデートが進んできたが、メディア経験自体がグローバル化し、文化の多様性が進む現代のメディア状況においては、もはや欧米中心の理論では正確な現状把握が困難な段階に來ていると筆者は感じているから。

② メディア経験と集団的心性に関する議論は、デジタル・メディアの拡大に着目することで国を単位とした視点からグローバルな視点へと論点を深めて発展してきたが、さらに個人を単位としたアイデンティティ形成のあり方についても考察すべき新たな段階に來ていると筆者は見ているから。

③ メディア経験の共有と自己意識に関する議論は、一定の地理的な広がりの中で生活を営むひとびとの間で共有されることを前提として理論化が進んできたが、メディア経験がグローバル化し国の圏域を越えて共有される現代においては、もはや理論的な実効性が薄れ始めていると筆者は見抜いているから。

④ メディア経験の共有と自己意識に関する議論は、国の圏域を越えた集団的な感性や自己意識について理論化できる段階にまで精度を上げたが、それがアンダーソンのナショナルリズム論を擁護する目的で進められているため、個人による自己表象化が進む現状を正確にすくい取れていないと筆者は考えているから。

問四 空欄 A・B に入る語の最も適切な組み合わせを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

8。

① A 耽溺 たんでき — B 通曉

② A 傾倒 — B 濫読

③ A 心酔 — B 造詣

④ A 感化 — B 精通

問五 — 線部3「新たな枠楕の中に放り込まれる」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 9。

① 多種多様な文化的表象に基づいて自己イメージを飾り立てていく現代の「わたし」のあり方においては、モデルにした文化的表象の印象が時代の変化とともに変容していくため、それに応じて自己イメージの受け取られ方も絶え間なく変動してしまうことを避けられないから。

② 本来の自分とは無関係な文化的表象に基づいて自己のアイデンティティを自認する現代の「わたし」のあり方においては、実存のロールモデルを参照しないと自己の表象が安定した意味を持たないため、常に他人を演じながら自己イメージを修正するという矛盾に絡めとられてしまうから。

③ 手軽に獲得できる多様な文化的アイデンティティに基づいて自己のアイデンティティを形成していく現代の「わたし」のあり方においては、自己形成と自己表象が分かちがたく結びついており、文化的表象との関連の中で自己イメージを更新していく状況から抜け出せなくなるから。

④ グローバルな拡がりの中で飛び込んでくる多様な文化表象に基づいて自己イメージを自由奔放に獲得する現代の「わたし」のあり方においては、自由度の高さに開放感や多幸感を感じるがゆえに文化混濁的な世界にはまり込んで、自分の集団的なアイデンティティを見失ってしまうから。

問六 — 線部4「どこかに社会なるものがあってそれを計測し理解しようとする構えとは、大きく異なっている」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

10。

① 「わたし」から遠く離れた領域が「社会」であり、計測や理解が必要となる疎遠なものだという認識とは異なり、現代人は「社会」をデジタルメディアを通してすぐに触れられる身近な領域として体感しているということ。

② 既存の規範を理解してそれに従うことで「社会」の一員として「わたし」を自覚するという認識とは異なり、現代人は個々につくった規範に従っており、「社会」を特に意識することもなく生活しているということ。

③ 定常的な「社会」を理解し、それに従うことで「わたし」の一貫性を確立するべきだという認識とは異なり、現代人は激しく変動する「社会」に合わせて「わたし」も常に仕切り直すべきだと感じているということ。

④ 分析可能な「社会」が「わたし」と切り離された形で存在するという認識とは異なり、現代人は自ら発信者として自己表象を变移させつつ他者との関係を仕切り直す行為において「社会」を触知しているということ。

問七 — 線部5「そこでのコミュニケーション作法が『上から目線』をうざいものに押し上げてしまっている」とある

が、どういふことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 11。

① 制作や発信の行為者であるのを拒絶できないメディア文化にあつては、複数の役割を自分一人でこなすのが普通であり、その感覚からすると準備が整った状態でコメントだけすればよいテレビ画面の識者には不快感を感じるといふこと。

② 制作や発信の行為者であるのを拒絶できないメディア文化にあつては、伝わり方に配慮してフラットな発言に努めるのが普通であり、その感覚からすると遠慮のない物言いをするテレビ画面の識者には不快感を感じるといふこと。

③ 誰もが表現行為者となり得るメディア文化にあつては、立場の上下を設けないコミュニケーションが標準であり、その感覚からすると特権的な立場からコメントを語るテレビ画面の識者の表現行為には不快感を感じるといふこと。

④ 誰もが表現行為者となり得るメディア文化にあつては、様々な意見が交錯するコミュニケーションが標準であり、その感覚からすると識者の意見だけを一方的に伝えるテレビ局の姿勢には不快感を感じるといふこと。

問八 空欄 C ・ D にあてはまる最も適切な語句を、それぞれ本文中から八字で抜き出して答えなさい。

句読点や記号も一字に数えます。解答番号は 12 ・ 13。

問九 — 線部6 『規律訓練』型のありようが失効しつつある」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 14。

- ① 人々が全ての役割を一人でこなして行為者として生きることが常態化し始めた現代では、認識者として自己をチェックしてリスクを回避するメカニズムの枠組みが無効になり始めているということ。
- ② 人々が全ての役割を一人でこなして行為者として生きることが常態化し始めた現代では、分業体制による訓練を通じて協調性を育てるメカニズムの枠組みが無効になり始めているということ。
- ③ 人々が個々につくった規範に従って行為者として生きることが常態化し始めた現代では、社会的規範を個人に内面化させて秩序を保つメカニズムの枠組みが無効になり始めているということ。
- ④ 人々が個々につくった規範に従って行為者として生きることが常態化し始めた現代では、宗教的修練を通じて絶対的な正義を教え込むメカニズムの枠組みが無効になり始めているということ。

問十 ――線部7「倫理の在り処に人々がやつきになる時代に突入した」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 15。

- ① 分業体制が安定していた時代が終焉すると、多種多様な価値観や正義が情報として飛び込んでくる一方で伝統的な規範意識が弱まり、人々が倫理的に正しいことが何かを自由に選び取れる状況が生まれたということ。
- ② 人々が社会的規範ではなく自分の規範に従って行為する時代になると、それぞれの価値観や正義が互いに衝突することになるため、人々が倫理的に正しいことが何かを必死に追求する状況が生まれたということ。
- ③ 人々が「自らの神」を信仰する時代になると、相対的に安定的な正義概念を頼りに思考することもできなくなるため、人々が倫理的に正しいことが何かを各自で勝手に判断してしまう状況が生まれたということ。
- ④ 行為についての善悪の判断がつかない時代になると、他人との衝突が増えて自己を正当化する必要が生じるため、人々が倫理的に正しいことが何かを他人に説明しなければならない状況が生まれたということ。

問十一 — 線部8 「生態論的思考が肝要である」とあるが、筆者はどのような論点からこのように述べているか。説明

として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16。

- ① 現代においては人間だけが特権化された立場にはいられず、倫理的な観点から先鋭的な論争が巻き起こることが予見されるため、人間以外の生物に関する倫理的視座を見直す必要があるという論点。
- ② 現代においては人間だけが特権化された立場にはいられず、人間と動物の間の境界は溶解しつつあるため、人間以外の生物の視点に立つて人間の関与による影響の大きさを可視化する必要があるという論点。
- ③ 現代においては人間だけが特権化された立場にはいられず、人間と他の動物との共生の可能性が問われているため、人間以外の生態的世界をよりダイナミックに観測することが必要になるという論点。
- ④ 現代においては人間だけが特権化された立場にはいられず、人間と環境との相互の影響が強く意識されるため、人間以外のエージェントとの関係性を全体的に捉える視点が必要になるという論点。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

民主主義（デモクラシー democracy）という言葉が生まれたのは古代ギリシアです。語源となったデモクラティア（demokratia）は、人民や民衆を意味するデーモスと、力や支配を意味するクラトスが結びついたもので、「人々の力、支配」が元々の意味でした。

かつて歌手のジョン・レノンには「Power to the People」という、文字通り、「人々に力を」と訴える曲を歌いました。街角で暮らす、ごく普通の人々が政治的に立ち上がり、自由と権利を勝ち取ることを訴えるものです。ベトナム戦争を時代背景としていますが、現在でも、その歌詞とリズムをよく耳にします。

¹ ある意味で、民主主義という言葉のもつ素朴な含意をもっともよく示しているのが、ジョンの歌詞かもしれません。というのも、デモクラシーという言葉は日本語に導入される際に、「民主主義」と訳されましたが（デモクラティズムでないにもかかわらず）、本来、「主義」という言葉がイメージさせるような抽象的な概念ではなかったからです。むしろ、普通の人々が力をもち、その声が政治に反映されること、あるいはそのための具体的な制度や実践を指すものが民主主義でした（まさに民、主力です）。

おそらく多くの人にとって、もっともイメージしやすい民主主義の姿は、古代ギリシアのアテナイのプニユクスと呼ばれる丘に集まって、議論を交わす人々の様子ではないでしょうか。ハクア^aのパルテノン神殿が見えるこの場所で、市民たちは戦争や外交を含む、ポリスの政策について代わる代わる演説し、最終的に議案を採決にかけました。これを民会といえます。もちろん拡声器などない時代です。人々は自分の肉声で話すしかありませんでした。当然、巧みに語る発言者に **A** が、そうでない発言者には **B** が飛んだことでしょう。この時代に弁論術が重視されたのも無理はありません。

もちろん、現代人の目からすると、「これが民主主義か」と違和感を覚えることも少なくないはず²です。例えば、この

民会には女性の姿がみられませんでした。民会は特定の有力者だけではなく、ごく一般の市民が参加し、開かれた場所で議論を交わすことにポイントがあったにもかかわらず、そこから女性が排除されていたのです。民会に参加する資格があったのは、父親がアテナイ市民である成人男性に限られました。さらに、どれだけ長くアテナイに居住していたとしても、居留外国人には市民権が与えられませんでした。また、後で触れるように、古代ギリシアのポリスには奴隷が存在しましたが、そのような人々も民会への参加が阻まれていました。

しかしながら、アテナイをはじめとする古代ギリシアの人々が C という言葉を作り出して実践し、それが後世に大きな影響を与えたことは否定できません。私たちの民主主義もまた、この出発点と深く結びついているのです。

ちなみに、このように書くと、「民主主義の起源は、³本^a当^bに古代ギリシアなのか」という疑問が生じるかもしれません。人々が集まり、自分たちの共同体の方針について議論を交わしたのは、なにも古代ギリシアだけではありません。世界各地で同じような自治のための集会が開かれていたことが、現在では次々と報告されています。

このような研究については、多くの議論があり、確定的なことをいうのは困難です。それでも、民主主義の起源を無理に一つにしぼることが乱暴であるのは間違いありません。おそらく人類の歴史を振り返れば、同じような自治的な集会は世界のあちこちで開かれていたはず。多くの場所で、人々は集まり、議論を通じて意思決定を行なったのでしよう。その初期においては、集会の場所は決まっていなかったかもしれない。決定に^bコウソク^aリヨクもなかったかもしれない。しかし、やがてそのような集会の場所は固定化され、開催の日時や周知・進行の手続きがルール化されていきました。そのような手続き化がかなり高度化した事例も少なくありませんでした。

このように、人間の集団が組織化していくにあたって、議論によって合意を生み出し、その合意に人々が自発的に服従することで規範を共有していく実践は、人類社会においてけっして例外的な事態ではなかったはず。だとすればなおさら、古代ギリシアから民主主義の歴史を語り始めることに理由はあるのでしょうか。

それでもあえて古代ギリシアに注目する理由は、古代ギリシアにおいて、このような民主主義の営みがきわめて徹底化

されたことにあります。これから詳しくみていくように、最盛期のアテナイの民主主義においては、一部の例外を除き、すべての公職が抽選で選ばれました。すべての市民は、ポリスを運営していく責任を負う可能性があったわけです。これに対し、選挙はむしろ「より優れた人々」を選ぶ仕組みとして理解され、その意味で貴族的であるとされました。さらに民会はすべての事柄について最終的な決定の権限をもちました。逆にいえば、民会の外部で重要な決定がなされることはありえなかったのです。また民衆裁判では、原告と被告の対等な弁論が制度化され、それを受けて陪審の人々が票決によって判決を下しました。

D

ではなく、

E

が、規範やルールを共有していることを前提に裁判が行われたのです。

もう一つ指摘するとすれば、古代ギリシアの人々は、民主主義の制度と実践について、きわめて自覚的でした。彼らは自分たちが採用している仕組みについて誇りを持ち、これを自らのアイデンティティとしました。彼らにとって市民であることは、まず何より、民会に参加し、公職に就き、さらに裁判の陪審員となる資格を指しました。人々はこのような資格を、負担であるというよりは名誉と考えました。①

古代ギリシアは巨大なメソポタミア文明からみれば、その辺境に過ぎませんでした。文明の中心となったのはチグリス、ユーフラテス川の周辺でした。両大河の流域は水の豊かな場所でしたが、周囲は乾燥地帯であり、遊牧民の活動地域でした。中国やエジプトなど他の地域と同じく、遊牧民と農耕民、そして商業民の交錯するところに、古代文明は生まれたのです。

各古代文明では、多様な都市国家が競い合うなかで統合が進み、広大な領域を支配する大帝國が生まれました。メソポタミアでも、バビロニア、アッシリア、ペルシャといった大帝國が知られています。そのような大帝國の攻防は、マケドニアのアレクサンドロス大王による遠征まで続き、最終的にはヘレニズム文明に組み込まれていきました。

ギリシアはメソポタミア文明の周辺に位置しましたが、このことはギリシアが文明の影響を受けつつも、独自の発展を遂げることを可能にしました。例えば、ギリシアはペルシャ帝國的遠征軍を破り、その独立を保持します。文明の恩恵を

^cキョウジュユする一方、大帝國に統合されなかったことが、その後のギリシアの歴史にとって大きな意味をもつことになりました。さらにいえば、ギリシアのあつたペロポネソス半島の地形もあり、ギリシア自体、一つの國家に統一されることがありませんでした。現在ではトルコにあたるイオニア地方を含め、ギリシアの世界はポリスと呼ばれる都市國家群が並立することで構成されたのです。

このような古代ギリシアの都市國家に特徴的なことは、古代帝國にみられた巨大な官僚制や、傭兵を中心とする職業軍人が存在しなかったことです。さらにいえば、神官たちが宗教的權威を独占することもありませんでした。古代帝國が広大な領域を統合するためには、官僚や常備軍、さらに宗教的支配を担う神官の支配を必要としましたが、古代ギリシアの都市國家にはその必要がなかったのです。これらのことが、⁴古代ギリシアにおける独自の民主主義の發展に大きな影響を与えることになりました。

ある意味で、古代ギリシアの民主主義は、官僚も職業軍人もいないところで、普通の市民たちが自ら國政を担い、決定を下し、武器を取って國のために戦つたことよつて実現しました。神官の支配が存在しないこともあり、宗教的權威から自由な人々はやがて、この世界を構成する原理や本質について、自由な検討を行うようになります。古代ギリシアにおける民主主義の發展が、^d哲学や科学の發展と軌を一にしたのは偶然ではありません。②

この地域において、かつてミケーネ時代には小王國が分立していました。しかしながら、やがて移動と混亂の時代が続くなかで、諸王國が崩壊し、社會のあり方が大きく変わっていきます。その渦中で生まれたのがポリスと呼ばれる國家形態でした。ミケーネ時代の小王國に比べればはるかに小規模な集團であり、互いに抗争する戰士たちの自衛集團としての性格をもっていました。その指導者たちが一カ所に集住して都市を形成し、そこから領域を支配するようになったのがポリスです（最大規模のポリスであるアテナイにおいて、市民は最盛期でも四万〜五万人だったとされます）。紀元前八世紀の半ばに、エーゲ海一帯にみられるようになり、その総数は一五〇〇に及びましたが、それぞれが獨立國家だったのです。

ポリスの中心はアクロポリスという丘でした。都市の防衛の拠点であり、ポリスという名もここから来ています。ポリスの生活の中心はアゴラと呼ばれる広場であり、この場所で人々は言葉を交わすとともに、商取引を行いました。民会も最初はここで行われていました。ポリスには城壁があり、都市の内部と周辺の田園地帯が区別されました。同時に、都市の内部においても神殿や劇場、広場といった公共の領域が、それ以外の領域と明確に区別されていました。公共の領域とはすべての市民に開かれた共通の場所であり、それぞれの家（オイコス）の領域と峻別されたのです。ここから「公」と「私」の区別が生じます。両者を明確に区別することが、ポリスの民主主義、さらには政治一般の重要な基礎となりました。^③

都市の周辺領域には田園が広がり、市民は少数の奴隷を用いて農業を行いました。まさにこの田園領域こそが生産活動の場であり、そこで働く農民こそポリス市民の中核を形成したのです。しばしば古代ギリシアでは、もっぱら奴隷が生産活動を行い、市民は労働から解放されていたとされますが、必ずしも適切な理解ではありません。重要なのはむしろ、農民として自ら生産活動も担った市民たちが、そのような活動と区別して政治などの公共的活動を捉えていたことです。「家」において市民は生産を行い、家族とその財産を維持しました。しかし、そのような私的領域と区別される公共の領域においては、市民は私的関心とは区別される、公共的な意識をもつことが期待されたのです。ある意味で、ポリスの構造こそが、そのような意識を生み出したのです。⁵

ここで「政治」とは何かを考えておきたいと思います。今日、私たちは政治については、ひどく漠然とした概念しかもっていません。これに対し、古代ギリシアにおいては、「政治」のイメージをはるかに明確です。⁶

すでに触れたように、ポリスの成立以前、この地域を支配したのは王たちですが、この王たちは官僚組織をもたず、貴族たちとの関係においても、相対的に優位に立つに過ぎませんでした。もともと王は戦士たちの組織の指導者であり、他の戦士からカクゼツした存在ではなかったのです。しかも、この王たちはポリスの成立の過程で没落し、有力者たる貴族たちが共同して交易や防衛にあたるようになります。貴族たちは変動期の小集団のリーダーに起源をもっていますが、す

でに触れたように、平民の大部分を構成する農民と同じ経済基盤に立っていました。貴族といえども、農民たちとまったく別の存在ではなかったのです。

したがって、都市に集住した貴族たちは政治・軍事・司法の主導権を握りましたが、平民もただ黙って従う存在ではありませんでした。ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』などを読んでいても、民会や裁判に一般の市民たちが集まっている様子が描かれています。彼らの声や雰囲気は、民会の決定や判決に少なからぬ影響を与えたでしょう。平民は貴族を批判し、その行動を制約することができたのです。^④

このようなポリスのあり方から生まれてきたのが「政治」です。「政治」には、公共の場所において、人々が言葉を交わし、多様な議論を批判的に検討した上で決定を行うという含意があります。あるいは、それこそが「政治」の定義なのです。

現在、英語などで政治をあらわす言葉はポリティクス (politics) です。この言葉はもちろん、古代ギリシアのポリスに起源をもちます。それでは、なぜ、ポリスという古代ギリシアに特有な都市国家の形式が、政治をあらわす一般的な言葉となっているのでしょうか。明らかにポリスのあり方と政治の概念には、深い結びつきがあるのです。

アリストテレスは『政治学』において、同じく支配といっても多様な種類があり、その区別をすることが何よりも重要であると述べています。例えば王はその臣民を支配するし、家の主人はその奴隷を支配するでしょう。しかし、ポリスにおける支配、すなわち政治的支配は、そのような支配とは違うのです。政治的支配の特徴は、自由で独立した人々の間における「相互的な支配」にありました。

現代の私たちは、政治という言葉を、ときに安易に使う傾向があります。およそ人間が集まれば、そこに政治があるとしばしばいわれますが、このような用法にはいささか注意が必要です。少なくとも古代ギリシアの人々にしてみれば、王が臣民を支配することや、主人が奴隷を力で隷属させることは、「政治的」とは呼ばれなかったからです。あくまで、自由で相互に独立した人々の間における共同の自己統治こそが「政治」だったのです。

(宇野重規『民主主義とは何か』による)

問一

——線部 a、e の漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して楷書で書きなさい。解答番号は a 17・

b 18・c 19・d 20・e 21。

問二

——線部 1「ある意味で、民主主義という言葉のもつ素朴な含意をもっともよく示している」とあるが、筆者はな

ぜそのように考えているか、理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

- ① 民主主義という言葉はデモクラシーを日本語に翻訳した言葉だが、本来の意味はまさに「Power to the People」という社会のあり方をシンプルに示す主義であり、ジョン・レノンの曲がそれを的確に表しているから。
- ② ジョン・レノンの「Power to the People」を翻訳すると、「人々に力を」であり、本来の民主主義の意味である「民主力」とほぼ同義であるため、ジョンが純粋に民主主義を広めようとしていたことが明らかであるから。
- ③ デモクラシーは、「主義」という言葉がイメージさせるような抽象的な概念ではなかったのだが、ジョン・レノンがベトナム戦争を背景に具体的な実践を呼びかけることで、その意味が多くの人に伝わったから。
- ④ デモクラシーという言葉の意味は、普通の人々が力をもち、その声が政治に反映されること、あるいはそのための具体的な制度や実践であり、ジョン・レノンが歌っている内容がそれを表現しているから。

問三

空欄

A

B

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

23。

① A 非難の声 — B 厳しい質問

② A 喝采 — B 野次

③ A 檄 — B 唾

④ A 称賛 — B 批判

問四

——線部2「違和感を覚えることも少なくない」とあるが、現代社会との比較で違和感を感じるのどのような点だと筆者は考えているか。適切でないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

24。

① 開かれた場所で議論を交わす民会にもかかわらず、そこから女性が排除されていた点。

② 長くアテナイに居住していたとしても、居留外国人には市民権が与えられていなかった点。

③ 古代ギリシアのポリスには奴隷が存在しており、そのような人が生産活動を支えていた点。

④ 民会に参加する資格があったのは、父親がアテナイ市民である成人男性に限られていた点。

問五

空欄

C

に入る語として最も適切なものを、本文中から十字以内で抜き出しなさい。解答番号は

25。

問六 — 線部3 「民主主義の起源は、本当に古代ギリシアなのか」とあるが、こうした疑問に対する筆者の考えとして

最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

26。

① 人類社会の歴史において、議論を通じて合意を形成していく事例は他にもあるが、古代ギリシアにおいてはきわめて徹底化され、しかも自覚的に運用されていたという点で、古代ギリシアから民主主義の歴史を語り始めるだけの理由はある。

② 民主主義の起源についての研究については、多くの議論があり、確定的なことをいうのは困難である。そのため、起源の妥当性については筆者も断言できず、本来であれば古代ギリシアから民主主義の起源を語り始めることは適切ではない。

③ 民主主義の起源を無理に一つにしぼることが乱暴であるのは間違いない。新しい研究では、複数の地域で集会の開催や進行の手続きが高度化した事例が報告されており、現代においては民主主義の起源が古代ギリシアではないことが明確となっている。

④ 人々が集まり、自分たちの共同体の方針について議論を交わしたのは古代ギリシアだけではなく、世界各地で同じような自治のための集會が開かれていたことが明らかになっているが、新しい研究では、民主主義の起源が古代ギリシアで間違いないことが明らかになった。

問七 空欄 、 に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選

びなさい。解答番号は 。

- ① D 上位の為政者や専門の裁判官 — E 平等な市民
- ② D 抽選で選ばれた人々 — E より優れた人々
- ③ D ポリス運営に責任を持つ全市民 — E 民会を運営する一部の市民
- ④ D 陪審員制度で選ばれた市民 — E 原告と被告

問八 — 線部4「古代ギリシアにおける独自の民主主義の発展」とあるが、これに影響を与えたことは何か。筆者の考

えとして適切でないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① ペロポネソス半島の地形もあり、ギリシア自体、一つの国家に統一されることがなかったこと。
- ② チグリス、ユーフラテス川の周辺とは違い、周囲に乾燥地帯や遊牧民の活動地域がなかったこと。
- ③ メソポタミア文明の周辺に位置しており、その文明の恵みを受ける一方、大帝国に統合されなかったこと。
- ④ 巨大な官僚制や、傭兵を中心とする職業軍人、宗教的権威を独占する神官が存在しなかったこと。

問九 — 線部5「ポリスの構造こそが、そのような意識を生み出した」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **29**。

① 都市の周辺領域には田園が広がり、中心にはアクロポリスという丘があったことから、市民は自分のポリスに独立国家としての愛着を感じ、公共的な意識を高めることができた。

② しばしば古代ギリシアでは、もっぱら奴隷が生産活動を行い、市民は労働から解放されていたとされるが、実態は市民も農作業などを担っており、高い公益的な意識をもっていた。

③ 城壁で区切られた都市の内部と外部、神殿や広場などの公共の領域とそれぞれの家が区別された構造が「公」と「私」の区別を生み、市民の公共的な意識を育んだ。

④ ポリスの生活の中心はアゴラと呼ばれる広場であり、この場所で人々は言葉を交わすとともに、商取引などをおこなっていたことから、公共的な生産活動を活発に行う意識が醸成された。

問十 — 線部6「政治」のイメージははるかに明確」とあるが、古代ギリシア人にとっての「政治」を説明する箇所を本文中から二十五字で抜き出しなさい。句読点や記号も一字に数えます。解答番号は **30**。

問十一 次の文は本文中のどこに入るのが最も適切か。本文中の①～④の記号で答えなさい。解答番号は **31**。

両者はともに、人々が平等な立場で議論を交わし、自分たちで納得したことのみ従う精神によって可能になったものです。